

は、これだけ広範な旅はすまい。どうということかといえば、撮影地は国内外を問わず、また配列の基準もわからない、それでいて不自然さが全くといってよいほど無いのである。地理を修めたことによって世の中をこのような形に切り取ることができるのであれば、地理教育のプラス面であろう。もし、配列が常識的でないという見解があれば、それは現在の地理教育の不徹底さを意味することになる。

そこで、フィールドノートのつけかたが一般にどんなものであるかに関心が生じた。というのも、評者のフィールドノートは学生当時には余滴的な部分が多すぎたもののその分今ひっくり返してもたまには面白いこともあるが、最近のものは数字が並んでいるだけで無味乾燥としか言い様がない。いつか本学の巡検を指導することになったら、現在のお茶の水女子大学地理学科学生のフィールドノートたるものを提出させてみようかと一瞬考えたが、仕事となれば恐らく面白くもおかしくもないものだろう。それより、誰もフィールドノートをつけてないことが分かったりするとかえって恐ろしいのでそれはやめることにした。

地理を教えることをなりわいとするものにとって、卒業生が本書のようにここまで地理に眼差しを投げかけ続けていることは一定の感慨を覚えるに違いない。ここまでとは、題材、撮影地から判断して卒業後も旅行に際してはフィールドノートをつけていることが推測されるのである。その後輩たる評者が、そのような教育に成功することはいささか考えにくいので、「お茶の水地理学会」の基本を構築された諸先生方に表すべき敬意はあまりにも大きい。

これに関して評者の反省を述べることは相当深刻な地理学的・地理教育論的議論になり得るのではないかというのが現在の予想であり、予想される深刻さに圧倒されたところで筆を置くことは、書評・紹介という本欄の性格から許されることであろう。

(田宮兵衛)

千歳壽一著『都市整備入門』

古今書院 1994年 114p.

本書は、冒頭で著者が述べているように、都市整備計画立案の科学化を推進する一翼を担うべく、都市整備関連の研究を志す地理学者のガイドブックの役を務めることを主目的としている。

わが国では戦後のドラスティックな経済成長に伴って急速に都市化が進行し、現在では総人口の7割以上が都市に居住している。そのため、人々が快適で豊かな都市生活を安心して送るためには、上下水道、都市施設などをはじめとする社会資本の整備を中心とした都市整備を行うことが重要になってくる。だが、現状をみるところ、東京一極集中や人口50万人以下の地方の中小都市の衰退など、わが国では、諸外国に例をみない多様で新しいタイプの都市問題が発生しており、従来の都市地理学の研究では十分な対応が困難な状況である。現代の都市問題へ地理学から解決策を提案するためには、これから都市地理学を学ぶ学部学生だけではなく、伝統的な都市地理学の研究を目指す地理学者も都市問題の解決策としての都市整備の技法や制度についての基礎的知識を身に付ける必要がある。

本書は、このような現代の社会的ニーズに地理学的立場から対応するために、著者が長年にわたり都市計画に携わってきた東京を例にとり、わが国の都市整備がどのような制度によって進められているのか、その成果はどう現れているのかを、都市整備に関する基礎的事項を丁寧に確認しながら解説した実用的な入門書である。また、著者が冒頭で主張しているように、従来の地理学は、視点の相違などが原因で、都市整備に有効な研究成果を提供しているとは必ずしもいえない。本書はこのような点も考慮して、都市整備上必要とされる研究成果を都市地理学の立場から提供することによって、地理学が科学に立脚した“役に立つ地理学”であり、社会に貢献する学問であることを実証する必要性を提唱した先駆的な研究書でもある。

本書の構成は、第1章 わが国の都市整備制度、第2章 都市計画の構成要素、第3章 わが国の都市整備制度の変遷 一東京を代表例として一、第4章 都市整備の課題と地理学となってお

り、読み進めるうちに、都市計画の知識をもたない者が都市計画の基礎的知識を身に付け、なおかつ地理学の立場から都市整備上の課題を検討することが可能となっている。巻末には本書の内容と関係の深い都市計画法の抜粋を掲載しており、都市計画法の関連部分を即座に対照することができるようになっている。

次に各章の内容を簡単に紹介し、いくつかの本書の特徴を挙げてみたい。

まず、第1章では、わが国の都市計画制度を中心とした都市整備制度について解説している。都市計画の制度の体系、内容だけではなく、都市計画とはどのようなものであるのか実態を十分に理解するために制度の根底にある基本的な考え方を詳細に紹介している。また、都市計画を実施する主体である官公庁内で使用されている基礎的な用語の説明や都市計画決定の手続きなど実務的基礎も合わせて説明している。これらの点は従来の都市地理学研究書ではみられなかった点であり、都市計画論からの研究成果を引用して都市地理学に新たな視点を加えたといえる。

第2章では、都市計画に影響を与える上位計画と都市計画上の個々の手法を整理・解説し、これらを踏まえて東京都（平成2年）の都市整備のメカニズムを解明している。都市計画関連の上位計画としては、全国総合開発計画に代表される国土計画や首都圏整備計画などの地域計画、都市計画の基本といえる土地利用計画を挙げ、東京都の都市計画との関連でこれら上位計画について解説している。また、都市整備のための都市計画上の手法としては、都市施設建設、市街地開発事業、地区計画を挙げ、図表を用いて詳細に紹介している。特に都市施設建設については、都市を形成する基盤的な要素であり、従来から地理学の研究対象とされることが多いため、交通施設と公園・緑地などに大きく2分し、適切な解説を加えている。交通施設では都市交通の体系を整理したうえで道路、鉄道、新交通システムなどの交通施設建設に関する都市計画制度を解説している。公園・緑地などでは主に土地利用の面から配置や規模の検討を行っている。だが、ここでは各事項の解説だけにとどまらず、読者のより深い理解を得るために、地理学以外の幅広い研究分野における具体的な研究事例を紹介することも考慮すべきではな

かっただろうか。

第3章では、わが国の都市計画制度の変遷を東京を代表例として説明している。東京を始めとする戦後の日本の都市では変化が激しく、これに伴って都市計画も大きく変化した。そこで、この推移を東京を中心に追うとともに、現行制度とそれによる計画が形成された経緯を解説している。本書では、わが国の都市計画の歴史を、近代都市計画の草創期としての明治時代～高度成長期（第1期）、工業化時代から情報化時代への過渡期である新都市計画法制定（1968年）～現代（第2期）というように大きく2つに分け、各時代の経済的・社会的背景を対照しながら解説していることは興味深い。著者の解説から、特に第2期では、急速な経済・社会の変動に伴い、わが国の都市計画制度が大きく変化していたことが容易に理解できる。

第4章では、都市問題と都市計画上でのその対応策を検討したうえで都市整備上の課題を検討し、また、これらを踏まえて、地理学者として何をすべきかという今後の研究課題について考察している。著者は、わが国で現在起こっている多様な都市問題の原因を、地域の実情に合わせたきめ細かい対応が認められていないことと、自治体に都市を総合的に捉えて一体的に整備する実質的権限が認められていないことであると主張し、これらを考慮した都市整備の必要性を提唱している。そして、そのために、地理学者は、都市形成のメカニズム解明や都市環境変化の把握を地理学の課題として追求することと、従来の地理学を越えてまちづくりの在り方を論じることが必要であると述べている。このような都市問題についての分析は、地理学研究を経て都市計画実務に携わった経験をもつ著者であるからこそ行えたものであり、実情に関する知識をあまりもっていない地理学研究者は、以上の点を十分に考慮して都市問題に関する研究を進めるべきであろう。

以上が各章で論じられた内容とそれに関する評者の若干の評である。著者が地理学だけではなく都市計画論の立場や行政的な立場における様々な関連文献を引用し、自らが東京の都市計画に携わってきた実績をもとに都市整備について解説している点が本書の最も高く評価されるべき点であろう。

現在、評者は、地理学を離れ、隣接分野である社会工学という学問分野で主に都市環境計画を研究しているが、他の研究分野に比べ、都市地理学を中心とした従来の地理学においては、都市整備上の有効な情報提供を行った研究成果があまり発表されてこなかったことを残念に思っている。都市整備実務に長年携わり、都市整備研究の豊富な蓄積をもつ著者の研究成果が結集した本書が地理学の発展を目指す研究者の助けとなり、地理学が社会に貢献しうる学問分野であることが証明できるような研究成果が今後発表されることを期待したい。

(山本佳世子)

アリソン・マレー著

熊谷圭知・内藤耕・葉倩瑋訳

『ノーマネー、ノーハネー

—ジャカルタの女露天商と売春婦たち—

木犀社 1994年 283p.

「インテリどもはいつも、自分たちが本物の生活をとらえそこなっているのではないかと不安なのだ。本物の生活とは、ファンキーな黒人や、プロボクサーや、荒牛乗りや、港の人夫や、ブドウ摘みの労働者や、密入国者といった連中のものなのだ」というトム・ウルフの引用から本書は始まる。著者アリソン・マレー氏は、オーストラリアの地理学者で、「何か本物の生活」を探究しようとかつて旅したことのあるインドネシアへやってきた。1980年代前半から後半にかけて、ジャカルタにおいて調査を重ね、カンボン（都市の下層階級地域）における特に女露天商と売春婦たちの日常生活世界を描写し、それをインドネシアの国家的文脈の中で捉えようとしている。

マレー氏の興味関心は、カンボンの日常生活および生き残りとして、「大首都」文化や支配エリート像との間にある矛盾にある。そして都市の変容を底辺から見ることで、その矛盾を読み解いていくことが本書の目的であった。研究対象はカンボンで小宇宙を成している露天商にとどまらず、売春婦にまで及んでいる。なぜなら、資本主義的発展の浸透がもたらした消費主義文化によって、カンボンの外に目を向けつつある若い女たち、売春婦

たちもまた、下層階級に位置付けられているからである。

本書は8章から成っている。前2章では、マクロな視点からカンボンを取り巻く社会的環境について述べられている。続く5章でカンボンで生きる人たちの日常生活が、エスノグラフィックに記述されている。終章で女露天商および売春婦たちが、どのように変容する社会へ対応しているのかを分析している。専門的な研究書でありながら、題名をはじめ章題が非常にアトラクティブで、読者の興味関心が直ちに喚起されるが、研究書であるために内容が専門化され、難解に感じる側面もあるかもしれない。しかし、そこは詳しくすぎるほどの訳注がカバーしている。また、マレー氏の調査結果の部分（人々とのやりとり）はインドネシア語から英訳、さらに邦訳と2度の翻訳を経ているにも拘わらず、人々のため息までが伝わってきそうなほどビビッドに描写されている。なお、本書は社会学・地理学という、異なった専門分野からの視野にたった共訳であることが、いまひとつの特徴である。その結果、社会学に関心を抱く地理学者マレー氏の問題意識が、より鮮明に読者に伝わってくる。以下、内容を章構成に従ってかいつまんで紹介していく。

1. 真理と幻想：インドネシアにおける「真理体制」たる国民原理パンチャシラが、諸制度や神話の創出、直接的な暴力を通して社会において強制されている。たとえば、女性に対するイメージから普遍的と思われるジェンダー役割を作り出していたり、カンボンに関して作り上げたマージナルなイメージから、カンボンに社会的悪の諸相が渦巻くものとして決めつけたりしている。しかし、カンボンに住む人たちは、こうした体制とそれに関する政策には、殆ど何も関与せずに生活しているのが現状である。このことから、「真理」とは幻想であり、また隠喩であるとニーチェを引用しながら指摘している。

2. 大ジャカルタ夢物語：ジャカルタはインドネシアの強権的な国家体制の延長上にある。差異化が社会的・空間的にはっきり顕れており、カンボン地域は、極度の人口密集とインフォーマル・セクターの活動によって特徴づけられた都市空間の一部となっている。政策において、インフォーマルな職業、とりわけベチャこぎや露天商が敵視